

平成26年1月31日（水）

八ヶ岳南麓里山再生・農業支援友の会

会員の皆様へ

《農場便り》

「自然栽培勉強会」

早いもので明日からは2月です。ここ3日ほどは非常に暖かく昨年とは大違いの気候です。もうすぐ立春ですが寒さのぶり返しもあるでしょう。明日には農場ではレタス類の播種を行います。寒さへ気を許すことは出来ません。今月は毎年のごとく2つの勉強会がありました。一つは山梨県内での勉強会、木村式自然栽培勉強会@山梨の総会と事例発表会、もう一つは全国規模での無肥料自然栽培勉強会です。前者は23日、後者は24日から26日まで東京で開催されました。山梨の勉強会は年々会員も増え52軒の農場が会員になりました。収穫のリスクから全面的に自然栽培を行っている農場は小生含めて4農場ですが仲間が増えることで自然栽培野菜・お米・果物が広く普及し地域のブランド化が図られればと密かに期待しているところです。会員農場は30代、40代の若い就農者たちが大半です。稲作、畑作、果樹の各部会の取り組んだ事例を発表し合い栽培技術の向上を図っているのです。後者の勉強会も同じような内容ですが北海道から九州までの自然栽培に取り組んでいる90農場が参加しました。60年来この農法を実践している北見の農場から今年就農する若者までと多彩の参加者でした。しかし自然栽培への思いは同じでまた新たなご縁を頂きました。この勉強会で確認し合えたことは自然栽培に取り組む中で植物の持つ命の多様性、お互いに必要があるから存在している、みんな違っていいということです。勉強会の実行委員長の以下の言葉は心に残るものでした。

「無肥料自然栽培は栽培方法であることの先に、みんなそのままでいい、違っていい、みんな必要ということ伝える架け橋の役割があるのです。農法にとらわれることなくすべてを受け入れる、最初の存在になりたいと思います。」と。

この思いを一層深くしたのが「1/4の奇跡～本当のことだから～」の映画の鑑賞でした。ご覧になった会員の方もいると思いますが養護学校教諭の山元加津子さんが学校の子供たちとの触れ合いの中で得た思いと通じるものがありました。

国政では命をつなぐ農業を他産業と同一に捉え、経済的側面偏重の大規模化、効率化、国際化への対応等優先の政策が叫ばれています。豊かな自然の太陽、土、水の恵みを頂きながら命をつなぐ食材を育てる循環型農業で自給率を高めたいものです。新たなエネルギーを頂いた二つの勉強会でした。

・冬越しのキャベツ (1/30)



・霜の降りた小麦畑 (1/30)



メール yamaki.yoshio@peach.plala.or.jp

携帯080-3080-3017